

丸山眞男・李沢厚対談メモ

丸山眞男

解説(平石直昭)……………	99
文献解題(川口雄一・金子元)……………	102
凡例……………	103
丸山眞男・李沢厚対談メモ……………	103

解説

平石直昭

本誌第十号には、近藤邦康氏によって整理された「一九八九年三月二〇日 丸山眞男・李沢厚対談」の記録が「特別寄稿」として載っている。以下に翻刻するのは、この対談用に丸山が準備したメモ（及び対談中の筆記）と推定される資料である。翻刻は川口雄一・金子元両

氏による。近藤氏による記録を裏づける自筆資料として貴重であり、またメモと記録とを比較すると興味深い点があがるので、本号に載せることにした。タイトルは内容に即して編者が付した。この「解説」では、まず周辺の事柄として、①対談が行われた「岩波書店旧館丸山研究室」と、②対談実現までの背景事情の二点について説明し、ついで内容に関して幾つか興味深い点を取りあげる。

①「特別寄稿」の冒頭には、対談が「岩波書店旧館丸山研究室」で行われたとある。しかしこうした部屋が岩波書店にあったこと、またその設置時期や性格について書いたものは、ほとんどないと思われる。幸いに筆者は伊藤修氏から、この点に関して詳しいご教示を得ることができたので、以下に紹介する。

伊藤氏は岩波「日本思想大系」の編集者の一人として、担当巻の仕事以外に、編集委員だった丸山の補助業務に当たり、また書店の若手編集者に呼びかけて、丸山の指導下に『文明論之概略』の読書会を組

織した(一九七八年)。その折のテープ起し原稿が後に岩波新書『文明論之概略』を読む』(上中下)の素材になった(一九八六年公刊)。さらに氏は丸山の最晩年に『丸山眞男集』の企画・編集に従い、また後年『丸山眞男回顧談』として公刊されるヒアリングの実務も担当された。一言でいえば、七〇年代から九〇年代にかけて丸山にもっとも親炙した編集者の一人である。原文は私信の形をとっているが、東大退職前後からの丸山の動向をうかがう上でも貴重なので、氏の許可を得て、関連する箇所をそのまま引用する(「」は改行箇所を示す)。

「一九七〇年、岩波書店は、三階建の本館(旧商大校舎)だけを残し、その北側に付属する社有地に七階建の今の本社ビルを建てました。その際、新しい本社ビルに移って空いた旧本館二階の旧役員室を二つの小部屋に区切り、その一室を、日本思想大系編集部として丸山先生に使っていただくことにしたのです。／当時、丸山先生は、東大紛争のなかで健康悪化。七〇年五月東大病院退院後、翌年三月初め東大辞職する頃まで、熱海の惜楳荘に長期滞在され、静養を兼ねて、五月に刊行開始した日本思想大系の編集委員としての作業や、執筆準備もしていただいていたと思います。おそらくその時期に先生にお願いしてご承諾いただいたものと思います。(中略)部屋の大きさは二間×四間くらいだったでしょうか。南側と西側が窓、北側が隣室との仕切りで書棚。(中略)置いてあるデスクや数人が囲める応接セットは、旧役員室で使っていたお古でした。／来室日は決まっておらず、先生のお仕事の都合で、予めご連絡があったり、突然見ええられたり、私が直接か

かわっていた二年余の時期は、平均すると週に一度から二度くらいだったでしょうか。在室時間もまちまちでした。／社内のこういう研究室的な部屋は、丸山先生以前にも、辞典の河野与一先生の部屋、大航海時代叢書の増田義郎先生の部屋などがありました」。

そして伊藤氏が「講座日本歴史」や「新書」の職場に移った後も、この部屋でしばしば丸山と面談し、その中から上記の『文明論之概略』を読む』や、「日本思想大系」が完結した後の「近代日本思想大系」の企画などもうまれたという。やがて「一九八九年には、先生の部屋のあった旧本館は老朽化が進み、とりこわすことになり……丸山先生の部屋は、旧本館から本社ビル七階の旧会長室に移転します。先生は旧本館の部屋にたいへん愛着をもっておられ、本社ビルに移ることに乗り気ではなく、交渉にあたった緑川社長は先生の同意をいただくのかなり苦労したらしい。先生としては、取り壊すのは残念だけれど自分の部屋を別に新しく用意してくれる必要はないということだったようです。このとき、先生の部屋はもう思想大系別室ではなくて丸山著作集準備室なのだというのが緑川社長の意向で、私にも「そのつもりでいてくれ」ということでした」。そして実際に一九九四年三月に『丸山眞男集』の刊行が決まると、この本社ビルの七階の部屋がその作業場になり、編集を手伝った若手研究者の「出勤」、編集・製作・校正担当者の出入りなど、「社内でも話題になるほど人の出入りの多い部屋」となったという。なお伊藤氏によれば、「丸山先生は、岩波書店のこの部屋については、「丸山研究室」という言い方をされるのを嫌

がっておられました。私もそのお気持ちが変わりますので、秘密にするということではありませんが、外部では、あまり話題にしないようにしていました。記録がほとんど残っていないのは、そのせいかもしれません」とのことである。

以上が伊藤氏のご教示の概略であり、ここから書店内では「丸山先生のお部屋」と呼ばれていたという「丸山研究室」が、一九七〇年に旧本館に設置され、八九年に本社ビルに移ったことがわかる。そして近藤氏の記録によれば、李沢厚氏との対談は八九年三月二〇日に旧本館で行われているから、それは本社ビルに移る直前の時期だったことになるわけである（対談時の記念写真が残っており、部屋の様子も窺うことができる）。

②対談は訪日中の李氏の希望で行われた。その背景事情については、近藤氏が東大社会科学研究所を退職されるさいの座談会「中国近代思想史と私」に言及がある（『社会科学研究』第四六巻第五号、一九九五年二月、二四〇～二四一頁）。それによれば近藤氏は、一九八二年に文部省在外研究員として中国に長期滞在し、多くの学術交流の機会をえた。なかでも「北京では、哲学の李沢厚と共産党史・マルクス主義思想の丁守和、上海では、経学史の湯志鈞、この三人から吸収するものが多かった」。そしてこの三人を順に日本に招くことを企画し、まず湯氏を半年招き、次に丁氏を呼ぼうとしたが時間がかかり（実現は九一年）、国際交流基金による李沢厚氏の招聘（八九年）が先行した。

そして「李氏の希望で、私が世話して丸山眞男・李沢厚対談を設定し、私が四時間ほど司会と通訳をつとめました」という。こうして対談が実現したわけである。

つぎにメモの内容に関して、幾つか興味深い点をあげる。編者が「Ⅰ」とした部分は、対談に先だって丸山が用意したメモであり、彼が対談で何を話すつもりでいたかを示している。これに対して「Ⅱ」は、李の質問を丸山が書きとめ、あるいは応答するためにその要点を記したものである。

これらを近藤氏作成の対談記録と照合すると、「Ⅰ」のなかで、『日本政治思想史研究』の内容や執筆の超学問的動機に関する項目（2. 戦中の「日本政治思想史研究」への批判について）や、徳川日本における諸子百家研究のあり方について（3. (2) 諸子百家の受容と注釈）などは、対談ではほとんど話されなかったことがわかる。また項目のうち、対談では李氏の質問に答えるなかで、適宜、順序をかえて語られているものもある反面で、メモでの順序と対談でのそれとが一致しているものがある。たとえば冒頭の旧制中学・高校時代の漢文・中文の学習について語った箇所は後者の例である。そして管見のかぎりでは、既刊の回顧談の類で丸山が中学時代に『論語』『孟子』を全巻読んだことにふれたものはない。その意味でこの部分は、貴重な伝記的情報といえる。

また対談では十分語られることなしに終わり、用意したメモの方が丸山の考えをよく伝えている項目もある。ドバリーの朱子学評価に対する批判はその例である。ここで丸山の念頭にあるのは、W.H. Theodore de Bary, *The Liberal Tradition in China*, 1983, Columbia University Press を邦訳した『朱子学と自由の伝統』であろう(山口久和訳、一九八七年、平凡社、丸山文庫登録番号 0188253)。実はドバリー自身は本書で、丸山の名をあげて批判しているわけではない。しかし本書がヨーロッパにも通じるような「自由」の伝統を朱子学に見いだし、その思想的意義の再評価を試みている点で、丸山は自分の学説が批判されたと受けとつたのであろう。いずれにせよ既刊の著述類には、丸山がドバリー説を批判した文章はないので、メモでのこの部分は貴重である。

右のケースとは逆に、丸山が用意したメモには該当項目がなく(あるいはあっても意味連関が異なる)、李の質問に触発されて丸山が展開した議論がかなりある。日本と中国における家族・社会のあり方やそれと関連する価値意識の違いに関する議論、あるいは福澤論吉評価に関する議論(変法自強運動がもっと早くに行われていれば、福澤は彼らと握手したであろう)などである。他方で記録から判断する限りでは、経験主義と神秘主義とが官長においていかに関連しているかという李の質問に、丸山は十分には答えていないようである。

丸山発言のなかで、既刊の著述類でのそれと重なるものは当然多い。アジアは一つではないとの主張(日中同文同種観への反対)、発生論と

本質論の区別、外来思想を変形させる日本の思想的要因論(いわゆる「古層」論)、徳川時代における日本儒学の特徴論などである。これに對して、他ではあまり見られない丸山の議論として以下の三点をあげておく。①形而上学・宇宙哲学を探究した例外的思想家としての三浦梅園に対する評価、②マルクス主義という普遍主義的世界観によって中国の伝統を相対化したという毛沢東に対する評価(中国独立の道具としてマルクス主義を使ったという見方への批判を含蓄する)、③「乱暴」であることを自覚した上で、ギリシア・中国・日本に、真・善・美を配当する見解の提示、である。

文献解題

川口雄一・金子元

底本は、丸山文庫所蔵の草稿類資料「March.20.89 李沢厚」 会談・会合のためのメモ(資料番号879-f-3)。レポート用紙(茶野・A4判)五枚。「近代日本について(さまざまな会合での発言)」と自書されたファイルに収められていた。

近藤邦康「一九八九年三月二〇日 丸山眞男・李沢厚対談」(本『報告』前号掲載)と突き合わせると、本資料中(a)(b)(c)等と立項・

整理されている後半三枚のメモは、対談冒頭の丸山の自己紹介等の発言と対応し、事前に用意されたもの、それについて最初の一、二枚は、李沢厚の発言ないし李発言への丸山の応答と対応しており、対談のなかで書きとられたものと推定される。この推定にもとづき、本稿では、作成された順序に並び替え翻刻した。

なお、本資料の当初の並び及びその内容は、東京女子大学丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ (<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives>) で確認できる。

凡 例

- 一 本文は原則として新字体・通用している字体で統一した。
- 一 句読点は原則として原資料を元にしたが、読みやすさを考慮して加除・変更した場合がある。
- 一 明らかでない誤りは断りなく直した場合がある。
- 一 判読不能な箇所は□で示した。
- 一 書名・史料名等には断りなく引用符（「」「」等）を付した。欧文书名はイタリックとした。
- 一 「」(ブラケット)で表示したものは、丸山が欄外に記入した注記や補足等である。

- 一 「」(亀甲括弧)で表示したものは、編者が付した注記である。ただし、●頁下段一二行の「名家(公孫龍など)が殆ど紹介されない」は、丸山による。
- 一 丸山によって抹消されているが、彼の考えを知る上で重要と思われる部分は〈 〉内に復元した。

丸山眞男・李沢厚対談メモ

〔I〕

- 1. 私の戦前・戦中の中国思想勉強
 - a) 中学 四年「論語」 五年「孟子」全部 訓読 白文練習

高等学校 長沢規矩也先生

イ、韓非子(中国からとりよせた出版)
ロ、現代中国文の解釈(発音ヌキ、意味だけ) ↓「人民日報」
を讀むのに役立つ。

b) 大学助手時代

イ、日本 江戸時代の儒教研究の前提として、あらためて中国古典及び書誌学(今文尚書・古今尚書等)を勉強する。諸子百家を中心とし、中国のその後の儒教史は、馮友蘭『中国哲学史』(二冊〔上巻(再版)、神州国光社、一九三一年、登録番号 0188493。)

下冊、商務印書館、一九三四年、登録番号 0188494) 等々の概説をよんだにとどまる。辛亥革命以後は『孫文全集』を外務省翻訳(外務省調査部訳編『孫文全集』全七巻、第一公論社、一九三九—四〇年、登録番号 0188359・0188360・0188361・0188362・0188363) で読んだだけ。中国共産党関係は入手不可能。Edger Snow, *Red Star over China* に感激。

c) 戦後は社会科学の分野でも中国研究者が続々出たので「東洋政治思想史」の講座名にもかかわらず、日本中心の研究。
∴中国近・現代思想史について語る資格はない。

2. 戦中の「日本政治思想史研究」への批判について

時代状況の産物であり、当時の支配的思潮にたいする抗議

イ、日本主義 + 東亜新秩序(大東亜共栄圏)

∥ 儒教(実は日本化された儒教、国体論的儒教「皇道」)の強調

津田左右吉への迫害

ロ、東洋精神・日本精神の超歴史性

a. 思想の歴史の変遷・堆積

b. ある思想(世界観)の内在的矛盾による崩壊 → 日本朱子学(儒教)に適用しようとした

ハ、モラリズム(西洋物質文明)の強調への反感

3. 程朱学、朱子学の見方

(1) 日本化された儒学(朱子学)と中国朱子学「儒学」とのちがいは

a) 宇宙哲学(形而上学)の欠如又は稀薄

朱子学においてもっとも鮮明。「太極図説」

b) 朝鮮儒教(李退溪)の媒介

↓ 闇斎学派

c) a) と関連し、理より気の重視。早くから気一元論の登場。

経験主義的傾向「cf. 国学」

d) 忠の孝への優越

「領主」

(法家ではない！)

日常身辺倫理の重視「善悪論」→「国家」

徳治

(2) 諸子百家の受容と注釈(名家(公孫龍など)が殆ど紹介されない)

(2) De Bary の『朱子学と自由』の伝統』の批判。

a) 「自由」の多義性

b) 近代の自由は「人権」と不可分。人権概念があるか？

アメリカ革命

フランス革命

個人の人権であって集合人権(民権)とは区別される。

a) 多数者対個人(少数者)の問題(多数の専制)

b) 国家(社会)権力からの自由。不可侵の人権。

↑ ↓ 参政権

永遠なもの(古典模範)

↓ (3) 「批林批孔」というスローガンの意味！ ↓中国とヨーロッパの類似

日本は歴史主義的！

〔Ⅱ〕

March. 20 '89 李沢厚

日本文化について

中国における文化論

↓中国文化と日本文化が近いという見方がかなりある。

根本にあったものを仏教も儒教も変えていない。

禅と武士道

非理性的なもの。

人間論
×本然之性
氣質之性
自然
Onozukara

空海 真言密教 即身成仏

〈知〉 真 〈理〉
〈情〉 善 道
Ⓜ

姜沆 李退溪

natura
〈Eidos〉